文句ばあさん

その5

もんくばあさん

作:近藤せいけん

文句ばあさん　その５

いつしか冷たい北風が吹く季節となりました。
文句ばあさんの畑では冬野菜の採り入れが始まりました。
ダイコン、ハクサイ、ネギ、コマツナ、サトイモ、沢山の収穫ができました。
「さあ、さあ、ダイコン、ハクサイは漬物を作りましょう」
「あけみちゃん、雄太、手伝ってちょうだい」
「雄太、ダイコンのドロ落とし、あけみちゃんはそこのタワシを使って、ダイコンの水洗いをしてね」
ばあさんは大きな樽を出して水洗いをして、ぬか床づくり。
おじいさんはハクサイをザク、ザク、と切って、大きな樽に漬け込んでいます。
冷たい風が吹いていますが、皆、汗だくの作業が続いています。
そこえおかあさんがお手代にきました。
「おばあさん、手代にきました。なにからしましょうか」
「やあ、ありがとう。それじゃ、あけみちゃんを手つだって、ダイコンの水洗いをしてもらいましょうかね」
「はい、解かりました」
「あけみも雄太もガンバッテいるね、エライよ」
「だって、お母さん。楽しいんだよー」
「ホーそれは良かった、ハハ、ハハ」
「さあ、ダイコンの水洗いが済んだら、二本ずつ葉っぱをしもで縛って、そこのベランダに干して下さい」
「よいしょ、よいしょ、どっこいしょ」
「二週間ぐらい干してから、漬けましょう」
「きっとおいしいタクアンになると思いますよ」
みんな生き生きと楽しみながら作業をしました。
寒い日が続きいつしか師走の３０日になりました。

恒例となっています、「餅つき大会」の日です。
近くの空手道場の生徒さん、師範の先生、ご近所の方々、悪がき、いろんな人達が集まりました。
大きな臼がでんと庭の中央広げられた、ムシロの上に据えられ、モチゴメが蒸し器に入れられ、白い湯気をもうもうとでて、「餅つき大会」の用意は整えられました。
空手道場の生徒さんが、大きなきねを持ち上げ、一番最初はおばあさんが熱いもちの反しで、若者がツキテです。
みんながかけ声をかけます。
「よいしょーよいしょーよいしょー」
「そおれ、そおれ、よいしょ、よいしょ」
「エイ、エイ、エイ、エイ、オウー」
ペッタン、ペッタン、ペッタン、ペッタン、
ツキテ、反しが交代して次々ともちをつきます。
沢山のもちがつきあがります。
近所のおかみさん達がテブルの上で、あんころもち、ダイコンおろしもち、きなこもちにします。
並んでいた子供達が両手にもちのパックをもらい縁側、いすに座って食べています。
大皿に載せられたタクワン漬け、ハクサイ漬けもたくさん並んでいます。
「ウワァー美味しい、つきたてのもちをよく伸びて、とてもおいしい。もっと食べよう」
「ホント、ホント、よく伸びること。おいしいー」
暖かいお茶を飲みながら楽しい宴が続きます。
みんな和気藹々。ニコニコしています。
文句ばあさんも今日は「微笑み」ばあさんです。
ここには古き懐かしい、日本の原風景があります。
ご近所の絆を大事にしている町があります。
文句ばあさんもおじいさんも、あけみちゃん、雄太、おかあさんもみんな一つ、まるで家族のように日常を過ごしています。
あと一日寝ると子供達の待ちわびるお正月。
希望の満ちた、いい年でありますように。